

ない。

パーネットやテイラーが主張したやうに、ソクラテスこそ、希臘思想に靈魂の觀念を、しかも我々の存在の完全な靈的部分として、導入した最初の人であつたらう。大體からいつて歴史的ソクラテスを傳へるものといつてよい「メモラビリア」やプラトンの初期の諸對話篇に於てさへ、靈魂の配慮と養育とは力説されてゐる。プラトンのやうに、ソクラテスによつて靈魂をかかも重んじるところを教へられ、彼の晩年に於ける靈魂の將來に就いての省察を知る者が、師の省察を自分で進め、それをヒュタゴラス派の學說や彼自身のイデア說に結び付けて、精巧なものにまで仕上げた、と考へることも許されるであらう。若し「フアイドン」をこのやうに解するとき、この對話篇こそ、プラトン自らがその最もよき思想の靈感を負ふところの人と感じた彼の師への素晴らしい贈物と考へられるであらう。

以上、ソクラテス問題に就いて、パーネットやテイラーとの意見の相違を述べた。ソクラテスやプラトンの研究に新しい刺戟を與へ、幾多の貢獻をなしたこの二人の學者に禮を失はしはなかつたかと惧れる。テイラーはその近著「ソクラテス」に於て感歎を禁じ得ない業蹟を示してゐる。如何なる程度にプラトンはソクラテスに負つてゐるか。その正確な規定に就いては意見の相違がある。だが次のことだけは眞理である。哲學をプラトンやアリストテレスの進んだ軌道に置いたのはソクラテスである。そしてこの兩人を通じて彼は、後代の哲學的思索に、又現代總ての教養ある

人士の思想に、最も力強い影響を與へてゐるのである。

(以上は英譯アリストテレス全集の編輯者として知られるロス教授が、英國古典學會總會——一九三三年四月六日ノティンガム大學——に於て試みた會長演説の要旨である。同會々報第三十卷七一—二四頁より服部英次郎抄譯)

補正 前號所載、エックハルト羅甸文著作集の發行所はライプチヒ、フエリクス・マイナー書店。

寄贈雜誌

七月號 哲學雜誌、文化、丁酉倫理講演集、宗教研究、基督教研究、理想(現代美の諸相)、生理學研究、唯物論研究、社會學徒、學校教育、信濃教育、奈良縣教育、教育日本、哲學改造、呂、大東、國維、願慧、湖畔の聲、美以部